

「Dr. ロビンスの 上手な英語医学論文の書き方」

(財)国際医学情報センター 編集

M. L. Robbins 著

斉 木 和 久 監訳

茂 木 富美子 訳

慶應義塾大学名誉教授

牛 場 大 蔵

近ごろ医学・生物学領域の科学論文を英文で発表することは、むしろ必須のこととされ、たとえ邦文誌でも英文抄録が要求されるのが普通となってきた。

このようなときに出版された本書は、英文原稿の作成に大なり小なり困難を感じている者にとって、たいへん適切な参考となるに違いない。本書の特徴は極めて実用的で、一言で言えばこのうえなく“handy”なことである。それは著者のメリイ・ロビンス博士が長い間リバイザーとして扱った日本人原稿の訂正例について、かゆい所へ手の届くように解説しているからにはかならない。しかも持ち運びに便利な小冊子として、どこでも利用できる配慮がなされている。

内容は「科学論文の基本的構成」の章から始まり、例えば緒言や考察の書き方、図表の作り方、図のリジ

ェンドと本文との関係、文章の能動形、受動形、あるいは主語の使用法の時代的変遷などが親切に述べられている。このようなことを読むと、われわれはいまさらながら科学論文の書き方には英文、邦文を問わず、基本的に大切なことが共通して存在することを知るわけで、現在日本の論文でもかなり不備なものの多いことを、反省させられる思いである。

本書の中心はなんといっても「よくある文法上の誤り」という章で、著者が扱った中から 130 に及ぶ例題をあげて、一々訂正している点にある。誤りは一応文法上の区分で示されているが、なるほどと思われる例が次々と現われてくる。おそらく多くの読者がインパクトを受けるであろうものに、例えば両者の違いとして、add と supplement, describe と report, examine と determine, contrary と in contrast などがある。

り、また all, any, but の使い方、almost similar の間違いなど、それらは日本人の“誤りやすい単語と句”として 1 表にまとめられている。本表はわれわれにとって、極めて有用なものとなろう。

私はかつて国際医学情報センターで長い間ロビンス博士とおつき合ひする機会をもち、自分の原稿も見えていただいたが、常に博士の真摯で親しみ深い人柄に敬服している。また博士は本書の序文にあるとおり、ジョージ・ワシントン大学の名誉教授(微生物学)であり、日本では国立予防衛生研究所や九州大学医学部で多くの研究者と交流された。常に心底から日本の学者のためを思って活躍されている博士である。

さて本書に類似の出版物としては、邦文、英文ともに過去数冊が知られている。なかでも同じセンターで 12 年前に編集した「演習・ライフサイエンスの英語」はかなりの評価を得たが、文法上の専門的解説が多く、読みづらい点がある。それに比べて本書は著者が自ら言われているように、“ネイティブの科学者”が書いたものとして、ユニークと言える。邦訳の文章もたいへん読みやすくできている。

本書を英文原稿作成の日常座右に置くものとして、広くすすめたい。

A 5 判変型 122 頁 図 1 写真 1
1989 定価 1,751 円(税込) 〒 300

医学書院 刊